

上司と子育て同棲中!? 発売記念 特別ショートストーリー

その日、デザイン会社 de ar knows に勤める佐藤は、いつもとは少し違う朝を迎えていた。

いつものように事務所に一番乗りし、窓を開けて新鮮な空気を取り入れる。そしていつものようにコーヒーマーカーをセットし、ばらばらと集まり始めた同僚達と挨拶を交わす。

そうこうしている間に入り口の辺りが騒がしくなり、ほらおいでなすったと思った辺りで、異変に気づいた。

「いいか？ 俺は大概のことは許してやれる。だけど今回だけは絶対ダメだからな。誰が何と言おうが、それだけはぜーったい譲れねえ」

普段なら、こんな風に口喧嘩して入ってくるのは、国見と一倉の日課のはずだった。紆余曲折あって、先日ようやくくっついた二人だったが、恋人同士になってからも相変わらず小規模な衝突を繰り返している。毎度毎度よくもそんなに喧嘩する材料が見つかるなと感心するぐらいだったのだが、今日の国見の相手は一倉ではなかった。

「べつにともちやんにゆずってもらわなくてもいいもん！ だってわかばがいちばんなんだから」

珍しく声を張り上げて怒っていたのは、何とあのいつも大人しくて可愛らしい若葉だった。

「だから、一番は俺なの！ 確かに俺だってお前のことは可愛いけど、それとこれとは別！」

「ちがうもん！ わかばがいちばんなんだもん！」

睨み合いながら入ってきた国見と若葉の後ろから、犬の蘇芳を連れて入ってきた一倉に、こっそりと近寄って声をかける。

「なあ、これ何事？」

「……実は」

ほとんど困り果てた様子で一倉が言った言葉を要約するところだ。

昨日の夜、さあ寝るぞと三人と一匹で横になったところで、若葉が言ったんだそうだ。

『あのね、あおいちゃん。あおいちゃんは、わかばのことすき？』

それは、子供の他愛無い愛情確認だったのだろうと思う。普段は言葉が足りない一倉も、そこはちゃんと理解して、少し照れながらもそれに応えたのだそうだ。

『当たり前だろう？ 若葉のことが大好きだ』

耳まで真っ赤にした一倉の答えに、若葉がえへへと照れ笑いをする。

想像しただけで口元が綻びそうになるほど、何とも微笑ましい光景だ。——ここまでは。

『わかばのこと、いちばんすき？』

照れ笑いたした後、何気なしに言った若葉のこの言葉に、過剰に反応した男がいた。

『一番？ 一番は俺に決まってるよな？』

引っこんでいけばいいものを、一倉のこゝにかけては心の狭さが猫の額よりも更に狭い男は、唇を尖らせてそう言ったんだそうだ。バカか、あんた空気読め。

そこから二人は互いが一番だと言って譲らず、くだらないと呆れて先に寝た一倉が朝起きたら、朝からまたいがみ合っていたと言うから呆れる。

まあ以前は国見なりにかなり若葉に気を遣っていたし、若葉のほうもそれなりに遠慮があったから、こうして喧嘩できるということは進歩なのかもしれないが。

「国見さん、いくら何でも大人げないですよ」

心底呆れた顔で言い聞かせようとするが、国見はまったくめげない。

「何だよ佐藤。お前どっちの味方な訳？」

「若葉ちゃん」

「あ、俺も」

「まあ、当然ですよね」

佐藤の即答に、同僚からも次々と声上がる。

「ほら！ みんなわかばのみかただもん！ ともちゃんのまけ！」

味方を得て俄然強気の若葉に、国見がふっと笑って言った。

「いいか若葉。男にはな、どうしても譲れない戦いつてやつがあるんだ」

あんたキメ顔で何言ってるんだ。言ってること恰好いいけど、中身はすげえ恰好悪い。無駄にイケメンだから余計に腹が立つ。

どうやらこの大人げない男は、どうにもまったく引く気がないらしい。このままでは今日の業務に支障をきたすため息を吐き、佐藤は一倉に「ちょっと耳貸せ」と秘策を授けることにした。

「……それを俺に言えと？ 佐藤さん、あんた俺に死ねって言ってるのか？」

渋い顔をする一倉に、仕方がないでしょと肩を竦める。

「あのまま放っておいたら、また拗ねて雲隠れするかもよ？」

さすがにそこまで大人げなくはないだろうとは思ったが、わざと脅すように声を潜めると、一倉が小さく呻いて頬を引きつらせた。現在絶賛修羅場中だ。国見が雲隠れしたら……なんて、考えただけで胃が痛くなるだろう。

「頼むよ、一倉。これはお前だけにしか使えない手なんだからさ」

一倉の性格上ハードルが高いとは分かっているから、あえて下手に出てお願いしてやる。

「……分かった」

仕方なさそうにため息を吐いた一倉に、内心で素直じゃないかと苦笑する。耳が赤くなってから、照れているのを誤魔化しているだけなのがるわかりだ。

その時ちょうど、国見と口喧嘩をしていたはずの若葉の矛先がこちらを向く。

「あおいちゃん！ あおいちゃんはわかばのことがいちばんすきだよね。」

行け一倉、今だ。一倉に目くばせすると心得たように頷いて、「ああ、もちろんだ」と若葉に同意した。

途端に国見が唇を尖らせ、「あくあ、負けた負けた」とふて腐れながら自分のデスクにつく。若葉はやったやったと喜びながらその辺を飛び跳ね、同僚達に「良かったな」と声をかけられ、満悦だ。

そうして皆の意識が若葉のほうに向くのを見計らって、一倉がすすつと国見のそばに寄っていく。

この先の展開を知っている佐藤は、生暖かい目でそれを見守った。

一倉がこほんつと咳払いすると、国見が「何だよ」と一倉のほうを見上げる。

「俺にとっての好きの一番は若葉だ」

「わざわざ念押ししなくても分かっているっつうの。俺だって別に本気で若葉と張り合ってた訳じゃ——」

「でも……その、あれだ。あ……愛してるの一番は、あんただから」

少し離れた佐藤の位置からでも分かるほど、一倉の顔は真っ赤になっていた。国見が言葉を忘れたようにぼかんと一倉を見上げる。しばらくあほ面を晒してから、ようやく正気を取り戻したように瞬きをした。

「……………やばい。今すぐ抱きたい」

「バ、バカじゃないのか？」

「いいか？ いいよな？ ここが嫌なら今すぐ俺のプライベートルームで——」

「いい訳ないだろうがっ」

「じゃあ、死ぬ気で我慢するから、今夜若葉が寝た後で……覚悟しとけよ？」

にやりと笑った国見が、一倉の手を取って甲にくちづける。怒るのかなと思った一倉は、頬を真っ赤に染めたまま、小さな声で言った。

「後で風呂に入れてくれるなら」

「もちろん。アフターサービスもばっちりしてやる」

満足げな笑みを浮かべる国見と、照れてはいるが嫌がっていない一倉がいちゃいちゃし出すのを見て、やっつけられるかと背中を向ける。さりげなく皆から死角になるように移動してやりながら。

せっかくな機嫌の若葉が、またへそを曲げたら大変だ。

やれやれ、と思いつつも、佐藤の口元にも笑みが浮かぶ。まったく世話が焼ける。でも、そんな状況がまんざらでもないから困る。

「なあ蒼衣。俺の愛してるの一番もお前だからな」

「あんたが言うのと、二番も三番もいるって言われてるみたいで嬉しくない」

「そういう言い方ないだろ？ そこは素直に喜んでけよ」

「あんたのこれまでの行いが悪いからだろ？」

「だからさあ、過去のことをいつまでも引きずるのやめようぜ？　ほんと、お前ってねちっこい性格してるよな」

「誰がねちっこい性格だった？　若葉相手に本気で喧嘩するような奴に言われたくない」

「はあ？　あんたの本気じゃねえし！　俺はただ、若葉がもつとわがまま言えるようになったらしいなと思って、わざと喧嘩吹っかけただけだしっ」

「まあ、後からは何とでも言えるからな」

「何だよ、その言い方っ！」

結局こうなるのか。

いつものごとく始まった二人の口喧嘩を背中越しに聞きながら、佐藤は堪え切れずぶっと吹き出した。

ああ、今日も平和だ。